

# 入学前集中日本語講座の効果

— 日本語能力試験N3以上N2未達の日本語学習者を対象に —

Effects of a pre-admission intensive Japanese language training  
— To Chinese students with between N2 and N3 level of Japanese proficiency

飯島 有美子\*  
Yumiko IIJIMA

## Abstract

This paper discusses the effects of an intensive Japanese language training provided to Chinese students prior to their admission to a Japanese university. One-month intensive course was provided to the Chinese students who were entering in the third year of a Japanese university and whose Japanese proficiency level was between N2 and N3 of the Japanese Proficiency Test. Past official second grade level of Japanese proficiency tests were used as the pre- and post- tests to measure the students' improvements. The results show 1) the one-month intensive course was not effective to raise students scores in the 'vocabulary' section, 2) in the 'listening section,' the students fell into two groups; one with great improvement and the other with no improvement, 3) in the 'Reading and grammar' section, one group showed much improvement while the other made a little improvement, 4) those who scored only 178 on the pre-test could reach the criteria to pass N2 level (240 points) at the end of the intensive training, 5) most students reported that they felt some improvements in their Japanese language skills regardless of their actual test scores. These results indicate that this kind of pre-admission intensive language training can be more effective if it put more emphasis on listening, reading and grammar rather than vocabulary.

キーワード：大学, 入学前, 集中日本語講座, 中国人留学生, 日本語レベル

## I . はじめに

関西の3学部からなる中規模私立大学(以下, K大学と記す)では, 2002年秋から中国の協定校より3年次編入生を受け入れる協定校編入制度が発足し, 毎年秋約20名を受け入れている。協定校編入制度の発足時には, 協定校で3年間日本語を勉強した後, K大学に3年次編入し2年間

---

\* 関西国際大学別科

勉強して卒業するという「3 + 2」プログラムであった。2012年からは、協定校で2年間日本語を勉強した後、K大学に3年次編入し2年間勉強して卒業するという「2 + 2」プログラムに変更された。

「3 + 2」プログラムの編入生は、来日前に旧日本語能力試験1級<sup>注1</sup>に合格している者も多く、上級レベルであったため、編入後日本語能力に大きな問題はなかった。「2 + 2」プログラムの編入生は、やはり1年の学習歴の差というのは大きく、日本語能力試験N1に合格している者はおらず、レベルが高い者でもN2合格レベルが数人であった。このような日本語レベルでは、編入後の授業について行けないことが懸念されたため、2014年度から、秋入学予定の「2 + 2」プログラムの編入生の内、日本語レベルが一定水準を満たしていない者に対し、入学前の8月末から9月末にかけて、約1か月間の入学前集中日本語講座「日本語特別講座」の受講を義務付けることになった。

筆者はこの「日本語特別講座」の設計・実施を担当したが、おそらく今後も開講されるであろう同様の講座についてへの示唆を得たいと考え、その効果を考察することにした。

## II . 先行研究

### 1. 学部留学生に必要とされる日本語能力

日本の大学の入試要項には、出願の条件として、日本語能力試験のN1かN2レベルが求められている場合が多い。日本語能力試験を主催している国際交流基金(2012)によると、それぞれのレベルの認定の目安として、N2レベルでは「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる<sup>1)</sup>」としており、その例として、「幅広い話題について書かれた新聞や雑誌の記事・解説、平易な論評など、論旨が明快な文章を理解することができる」とあり、抽象的な事象についても日本語が使えるというレベルになっている。それに対し、1つ下のレベルN3では「日常的な場面で使われている日本語をある程度理解することができる」とし、その場面例もあくまで日常的な具体的な内容が挙げられている。

水本・池田(2002)は、理系学部留学生を旧日本語能力試験1級レベルと同2級レベルに分け、学部での授業の成績(GPA)との相関を示し、2級レベルの者は困難を抱えていると指摘している。「不可」の科目数を見ても、第1学期はさほど数は多くないが、第2学期になると、不可の数が増える傾向があるとしている。彼らの専門科目である理系の科目であっても、一般教養的な科目であっても、その傾向は変わらない。

大学での学習では、具体的な事象だけにとどまらず、当然、抽象的な事象や概念まで扱われ、それを理解しなければならないこと、また、2級レベルの留学生であっても学部の学習に困難を生じているということを鑑みれば、学部留学生に求められる日本語力は、最低でもN2レベルは欲しいと言ってもよいだろう。

### 2. 入学前集中日本語講座の実施について

K大学で初めて入学前集中日本語講座である「日本語特別講座」を開講するにあたり、授業設計の参考にするために、先行実践研究を探した。入学予定の留学生を早めに来日させ、入学前に集中日本語講座を実施した研究は、筆者が探した限りでは多くはなかった。

犬塚・佐藤（2005）は県立島根大学において6週間の講座を実施し、その際日本語レベルを測るため、講座前後に旧日本語能力試験1級の模擬試験問題を用い、大部分の受講生が「聴解」と「読解・文法」分野で点数が伸びた一方、「文字・語彙」分野ではさほど伸びなかったという結果を報告している。そして、受講終了後すぐと入学4か月後に、受講者にアンケートを行っているが、受講終了後すぐのアンケートの「今回の講座の授業は入学後必要だと思ったか」という問いに対し、全員が「大変必要」または「必要」と回答しており、入学4か月後のアンケートの「入学後実際に役に立ったか」という問い対しても、全員が「大変役に立った」と「役に立った」と回答しているように、受講生は講座の受講を有意義に感じている。また、受講者はこのような入学前教育の実施場所について、「自分の国で受ける」よりも「日本で受ける方がよい」と全員が回答している。

また、向井・松井・西村（2003）は、松山東雲女子大学において、2週間の、1年次入学生に対しては日本語レベル初中級講座を、3年次編入留学生に対しては日本語の勉強よりも、むしろ大学や地域での生活に慣れるための集中講座を実施し、報告をしている。それによると、受講生に行ったアンケート（講座終了後すぐ・入学後9か月後）で講座の必要性を問うているが、回答が得られた全員が必要であるとしている。

### Ⅲ．本稿の目的と意義

上述のように、学部留学生に求められている日本語能力は最低でも日本語能力試験N2レベルと考えられるが、どの程度の日本語能力の日本語学習者が、1か月程度の入学前来自集中日本語講座を受講すれば、N2に達するののかという研究はない。そこで、本稿では2014年夏にK大学で実施された「日本語特別講座」で、N3レベル以上N2未達の学習者が約1か月間の入学前来自集中日本語講座を受講すると、どのように日本語力が伸びるのか、また本人らは自分の日本語能力の伸びについて、どのように実感しているのかについて、明かにしたい。

日本の高等教育機関において、今後も留学生の受け入れはますます進んでいくであろう。優秀な留学生を獲得するためには、入学試験時に既にN2に合格している留学生を獲得するのみならず、N2に未達であっても、入学前に集中講座を受講すれば、N2に達するであろう学生を獲得することも有用である。

### Ⅳ．方法

研究方法は、2014年8月末から9月末にかけて筆者が担当した入学前来自集中日本語講座である「日本語特別講座」における、講座開始時と修了時に実施した日本語能力テストの成績と講座修了時アンケートを分析する。次に、この「日本語特別講座」の概要を示す。

期間：2014年8月27日～9月22日

受講者：K大学への3年次編入予定者6名

国籍：全員中国

日本語学習歴：中国の大学の日本語専攻で2年間

授業数：60コマ（1コマ90分）、1日当たり3～4コマ

授業内容：メインテキストを用い読解・作文・中級文法・シャドーイング、初級文法の復習

使用教材：メインテキスト『日本語中級 J501—中級から上級へ—』スリーエーネットワーク

初級文法の復習プリント（動詞の分類、動詞の各形、やりもらい、助詞等）

自宅学習：毎日1時間程度の学習をするように、宿題を課した

講座の目標は、大学入学前に集中的に日本語の授業を受講し、話す・聞く・読む・書くの日本語能力をバランスよく向上させ、大学の授業についていけるようにすることとした。「大学の授業について行けるように」というのは、先行研究にもあったように、大学学部で学ぶためには日本語能力が最低でもN2が必要とされることから、受講生の日本語レベルをN2レベルに引き上げることとした。大学で学ぶために、レポートが書けるようになるや口頭発表ができる等のアカデミックジャパニーズが必要であるとの声もあるが、K大学には学部の授業としてアカデミックジャパニーズを学ぶ機会が十分あるので、まずは本講座では、基礎的な日本語能力の向上を目指すことにした。

受講者は来日したばかりで、話すことが得意ではないが、「会話」という科目は設けなかった。あらかじめ用意された教材や場面と教師のコントロール下で進められる会話の練習ではなく、本講座では、できるかぎり教師は、学生とその場面で必要とされる対話をしながら、学習事項を理解させ、できるかぎり学生の発話を促し、言いたいことが表現できるように手助けをするようにした。

テストは、メインテキストは1課終わる毎に漢字・文法・語彙について、初級文法は各単元終わる毎に、形成的テストとして行い、正答率が80%未満の者は、80%を超えるまで再テストを受けさせ、最終的には受講者全員が全テストで80%を超えることができた。その他、講座末に総括テストを実施した。

受講者は、全授業に無欠席、無遅刻で、宿題忘れはなく、提出物は全部提出した。

## V. 結果

### 1. 日本語能力テストの結果

「日本語特別講座」の開始時と修了時に日本語能力を測るテストを実施した。テストは、開始時には2008年度の、修了時には2009年度第2回の、旧日本語能力試験2級の過去問題<sup>注2</sup>を使用した。日本語能力試験は「文字・語彙」「聴解」「読解・文法」の3分野に分かれており、「文字・語彙」と「聴解」の満点は100点、「読解・文法」は200点で、合計400点となる。60%以上の得点、すなわち240点以上が合格となる。テストの結果は下の表1の通りである。

詳細を見るために、さらに合計点と各分野について図1～4に示す。各図とも縦軸はテストの点数を、横軸のアルファベットは各受講生を表している。アルファベットの下に数字はその学生が取った得点を示している。つまり、合計（図1）では、受講生Aの開始時の得点は178点で、修了時の得点は240点ということである。

合計点（図1）を見ると、開始時には最高208点の受講生Cでも2級合格レベルには及ばず、他の者は200点を切っている。400点満点なので、半分も正答できていない。Fにいたっては127

表1 受講生の日本語能力テストの結果

受講生	講座開始時				講座修了時			
	文字・語彙	聴解	読解・文法	合計	文字・語彙	聴解	読解・文法	合計
A	60	43	75	178	62	57	121	240
B	66	25	102	193	64	25	120	209
C	72	46	90	208	68	86	117	271
D	67	39	84	190	69	36	94	199
E	63	46	65	174	56	46	92	194
F	48	21	58	127	50	36	82	168
満点	100	100	200	400	100	100	200	400
平均点	62.7	36.7	79	178.3	61.5	57.9	104.3	213.5

点で、3割の正答率である。平均点を見ると、開始時が178.3点、修了時が213.5と約35点伸びているが、この中で大きく点数が伸びたAとCは、それぞれ62点、63点アップし、修了時には240点、271点を取っており、2級に合格するレベルまでになった。BとDはあまり得点が伸びなかった。

文字・語彙(図2)は、開始時と修了時の得点とも、Fが50点前後というのを除き、60点から70点程度である。各個人の変化には、多少の点数の増減はあるが、大きい変化は見られない。平均点の変化を見ても、開始時が62.7点なのに対して、修了時が61.5点となっている。

聴解(図3)では、平均点を見ると、開始時では36.7点、修了時では57.9と20点近く伸びが見られるが、B、D、Eのようにほとんど伸びが見られない者もいれば、AとFのように15点ほど伸びた者、中にはCのように40点も伸びた者もいる。

読解・文法(図4)を見ると、平均点では開始時が79.0点、修了時が104.3点と約25点伸びている。84点から94点と10点しか伸びが見られないDを除き、総じて得点が伸びている。

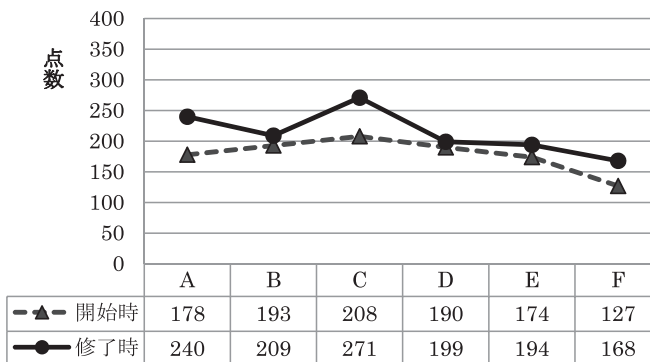


図1 日本語能力テスト結果(合計)(平均点 開始時:178.3, 修了時:213.5)

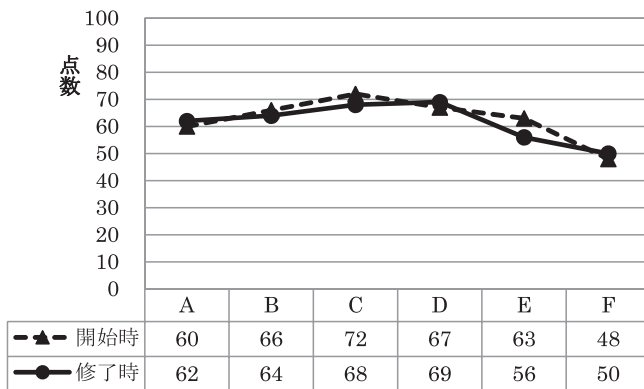


図2 日本語能力テスト結果「文字・語彙」(平均点 開始時：62.7, 終了時：61.5)

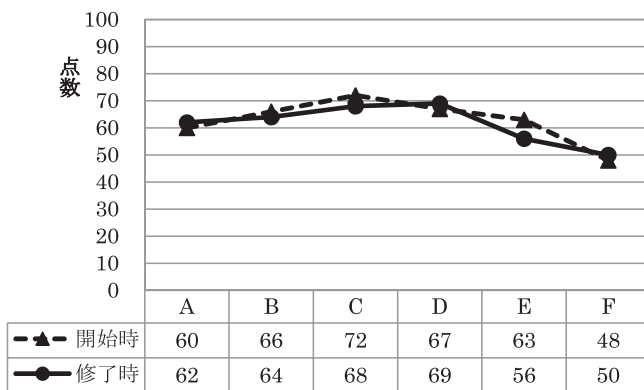


図3 日本語能力テスト結果「聴解」(平均点 開始時：36.7, 終了時：57.9)

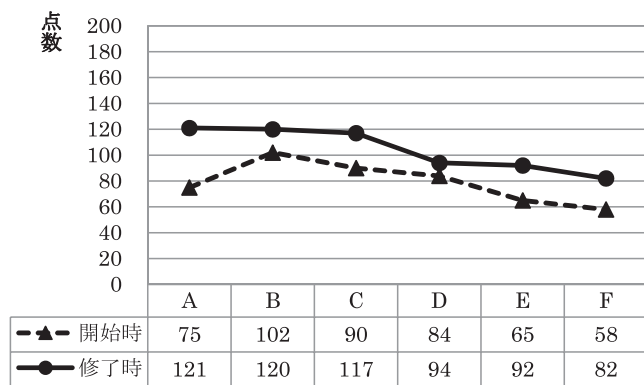


図4 日本語能力テスト結果「読解・文法」(平均点 開始時：79.0, 終了時：104.3)

## 2. 講座修了時アンケート結果

講座の修了時に、受講生に講座についてのアンケートに答えてもらった。受講者6名全員から回答を得た。アンケートは無記名で行ったが、差支えない人には名前を記入してもらった。各質問についての結果を表2～6に示す。

まず、講座全体について「入学前に今回の日本語特別講座を受けてよかったか」(表2)という質問に対し、全員が「大変良かった」と「良かった」と回答しており、受講生は講座に対し好評価をしている。授業の難易度(表3)については、全員が「ちょうど良かった」と回答している。そして、「講座を受けたことは、今後の大学での勉学に役に立つと思うか」(表4)という質問に対しては、全員が「大変役に立つ」と「役に立つ」と答えており、受講生が受講の意義を感じながら、授業を受けていたことが見える。

それでは、受講生は自分の日本語能力の伸びについては、どのように実感していたのだろうか。(表5)ほとんどの者がどの項目においても、日本語能力が伸びたと実感していることがわかる。前項で述べた日本語能力テストの「文字・語彙」の結果では、どの受講者も点数の伸びがほとんど見られなかったが、このアンケートによると、本人らは「語彙力」の伸びも感じている。「聞く

表2 講座を受けてよかったか(人数)

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	全く良くなかった
3	2	0	0	0

表3 授業の難易度(人数)

大変簡単だった	簡単だった	ちょうど良かった	難しかった	大変難しかった
0	0	5	0	0

表4 講座は入学後役に立つかどうか(人数)

大変役に立つ	役に立つ	普通	あまり役に立たない	全く役に立たない
2	3	0	0	0

表5 日本語力の伸び(学生の実感)(人数)

	大変上がった	上がった	変わらない	あまり上がらなかった	全く上がらなかった
全体的な日本語力	0	6	0	0	0
聞く力	0	5	0	1	0
話す力	1	4	1	0	0
読む力	1	5	0	0	0
書く力	0	6	0	0	0
文法力	1	5	0	0	0
漢字力	2	4	0	0	0
語彙力	2	3	1	0	0

力」では、6人中5名が「上がった」と答えている。この中に聴解テストの点が開始時には39点だったのが修了時には36点であったDと、講座開始時も修了時も46点と変化のなかったEも含まれており、点数的には伸びが見られなかったにも関わらず、本人らの実感では「聞く力」が「上がった」している。また、「あまり上がらなかった」と1人が回答しているが、この受講生は聴解テストで、講座開始時も修了時も25点を取ったBであり、本人も「聞く力」の伸び悩みを感じていたことがわかる。

表6 日本の生活に慣れるのに有意義だったか（人数）

大変有意義だった	有意義だった	普通	あまり有意義ではなかった	全く有意義ではなかった
1	3	2	0	0

また、「来日してからの約1か月間は、日本の生活に慣れるのに、有意義だったか」（表6）という質問をしたが、「大変有意義だった」と「有意義だった」を合わせて4名、「普通」が2名であった。

## VI. 考察

これまで日本語特別講座での、講座開始時と修了時における受講生の日本語能力の変化と、修了時に受講生を対象に実施した講座についてのアンケートの結果を示してきた。これらの結果から、学習者の日本語能力の伸びにどのような傾向があるか考察していく。

N2合格レベルに達した受講生AとC（以下、N2合格レベル到達者と記す）にはどのような傾向があるのだろうか。開始時に400満点中3割程度しか点数が取れていないFを除いた、AからEの5人について見ていこう。まず、合計点では、N2合格レベル到達者は、開始時と修了時の得点の伸びが60点強であるのに比べ、N2合格レベル未達のB、D、Eは11点から20点の伸びにとどまっている。伸びた群とあまり伸びなかった群に大きく分かれた。また、開始時に得点の高い者のほうが、伸びが大きいということはなく、開始時に198点で2番目に得点が高いBは修了時には209点と11点の伸びであるのに対し、開始時に178点で4番目であったAは修了時には240点になり62点の伸びを見せている。

では、各科目の得点の伸びはどうだろうか。「文字・語彙」（満点100点）では、全受講生とも開始時と修了時の大きな変化は見られない。このN3レベル以上N2未達の受講生の「文字・語彙」の得点が伸びないという結果は、犬塚・佐藤（2005）が行った1級レベルの学習者対象の入学前集日集中日本語講座での結果と同様であった。現行の日本語能力試験では、各レベルで必要とされる習得語彙数は公表されていないが、N2と同等とされている旧日本語能力試験2級では、語彙数は6000語とされている。このように語彙数が多いため、今回のような期間が短い集中コースでは、学習する範囲が限られており、得点が伸びにくかったと考えられる。

次に、「聴解」（満点100点）では、N2合格レベル到達者のAとCは、得点の伸びがそれぞれ24点と40点で、大きく伸びている。一方、N2合格レベル未達のBとEは全く変化がなく、Dにおいては3点下がっている。このように、伸びた群と全く伸びなかった群に大きく分かれた。

最後に、「読解・文法」（満点200点）を見てみよう。N2合格レベル到達者のAとCは、やはり



「聴解」の伸びと同様に、「読解・文法」の伸びも、それぞれ46点と27点で大きい。一方、N2合格レベル未達のBとDは、「聴解」の伸びがなかったのと同様に、「読解・文法」の伸びもあまり見られない。同じく「聴解」の伸びはなかったEは、「読解・文法」では27点の伸びを見せている。「読解・文法」でも、大きく伸びた群とあまり伸びなかった群に大きく分かれているように見える。

このように、大きく伸びた者もあまり伸びなかった者もいるが、受講生は自分の日本語能力の伸びについて、「全体的な日本語力」「聞く力」「書く力」等の全ての項目において、全員が「上がった」と感じており、受講生は自分の日本語能力について、自信を持つことができたのではないだろうか。ただ、「聴解」で開始時も終了時も25点で、アンケートでも「聞く力があまり上がらなかった」と回答したBは、自分の伸び悩みを自覚していたのではないだろうか。授業担当者は、講座途中でBのような状態の受講者の存在に気づき、何か支援策を講じる必要があるだろう。

以上のことから、今回の日本語特別講座の結果から傾向を考察すると、以下ようになる。日本語特別講座の開始時に受けた日本語能力試験2級の過去問題で、得点(合計)が170点台から200点台の受講生が、1か月の集中講座を受講した結果、

- ①「文字・語彙」は、1か月の集中講座ではさほど得点が伸びない。
- ②「聴解」は、得点が大きく伸びた者と全く伸びなかった者に大きく分かれた。
- ③「読解・文法」は、得点が大きく伸びた者とあまり伸びなかった者に大きく分かれた。
- ④開始時に合計点が178点の者でも、終了時にN2合格(240点)レベルにまで到達する可能性がある。
- ⑤実際の日本能力の伸びとは関係なく、自分の日本語能力が上がったと実感している受講者が多かった。

## Ⅶ. おわりに

今回明らかになった日本語特別講座の結果の傾向から、おそらく今後も開講するであろう入学前来自集中日本語講座への示唆を考えたい。1か月程度と短い期間しかない集中講座では、まずは、伸びが期待できる「読解・文法」と「聴解」に力を入れた方がよいであろう。しかし、得点が大きく伸びた者とそうでない者の差が大きかったので、得点の伸びが少なかった受講者の傾向を分析し、それを授業に反映する必要がある。また、「読解・文法」は「読解」と「文法」に分けて、それぞれについてどのような傾向があるか、詳しく分析を進める必要がある。「文字・語彙」はN2が試験範囲とする語彙数が6000語と多いので、効果は性急には望めない。教師が「学生の語彙を増やしてあげないといけない!!」と思い、授業中にたくさんの語彙を教えようとするのは、あまり得策ではないのかもしれない。

しかし、本稿で研究対象となった受講生は6人と少なく、入学前来自集中日本語講座の効果が統計的な有意性をもって証明されてはいない。取組みを重ねデータを積み重ねると共に、より現実的な教育的取組みにつなげることを今後の課題としたい。

**【注】**

注1 日本語能力試験は2010年に大きく改訂された。レベルは、旧では1～4級であったが、新ではN1～N5となった（数字が小さいほど高度なレベル）。1級はN1と合格ラインがほぼ同じ。2級はN2とほぼ同じレベルとされている。

注2 現行の日本語能力試験では、過去問題が公表されていないため、N2とほぼ同レベルとされている旧日本語試験の2級の過去問題を使用した。

**【引用文献】**

- 1) 独立行政法人国際交流基金・公益財団法人日本語国際教育支援協会（2012）『日本語能力試験公式問題集 N1』凡人社

**【参考文献】**

- ・犬塚・佐藤（2005）「島根県立大学における入学前日本語教育—「島根県立大学交流県留学生日本語研修2003」の報告と評価—」『総合政策論叢』第9号，島根県立大学，pp.53-84
- ・酒井たか子（2004）「留学生センター日本語教育カリキュラム改善に向けて—留学生の指導教官へのアンケート調査報告—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』（19），筑波大学留学生センター，pp.31-52
- ・水本光美・池田隆介（2002）「日本語能力試験2級レベルの学部留学生在が抱える問題点—理工系学部留学生のケーススタディー—」『専門日本語教育研究』第4号，専門教育学会，pp.19-26
- ・向井留美子・松井忍・西村浩子（2003）「留学生支援としての入学前日本語・日本文化集中講座の実施報告と今後の可能性」『松山東雲女子大学人文学部紀要』11，松山東雲女子大学，pp.173-185
- ・『平成20年度日本語能力試験問題と正解1・2級』（2009）財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金，凡人社
- ・『平成21年度第2回日本語能力試験問題と正解1・2級』（2010）財団法人日本国際教育支援協会・独立行政法人国際交流基金，凡人社